

中支から南支まで 鯨部隊野戦病院

香川県 水谷隆雄

「水谷さんは何年に徴集で、戦地は何処でしたか。大正九年四月十七日、香川県の現在の国分寺町で生れたので、昭和十五年徴集です。検査の結果第二乙種でした。昭和十六年十二月十五日頃か、教育召集で善通寺の輜重隊に入隊ですが、翌年一月十五日召集解除となりました。」

大東亜戦争の戦果が華々しく報じられていましたが、何時再召集が来るかと、ある不安ともいえる気持ちの毎日でした。やはり、昭和十七年七月十五日召集令状が届けられました。善通寺の学校に集合し、坂出港を出帆したのが十九日頃だったと記憶しております。

貨物船の中は二段にし、いわゆる蚕棚ですから頭も上げられぬ窮屈な状態で上海港に上陸しました。その

頃はまだ、空襲や、潜水艦の攻撃も無く幸でした。揚子江を船で遡り、湖北省の咸寧という所へ上陸したのです。私たちの部隊は第四十師団（四国編成）で通称は鯨部隊です。

私は輜重兵でしたが勤務は第四十師団野戦病院でした。仕事は病院関係の輸送で、駄馬扱いですが経験無くとも農家でしたので馬扱いは馴れていました。そのためか、私は副官の馬当番を命ぜられました。

野戦病院は支那事变当時咸寧に開設されていきましたので、そこを根拠地として、宜昌作戦、第一次・第二次長沙作戦などに参加し、師団長から賞詞も受けていたということでした。私たちの勤務中も、大別山とか、江北殲滅作戦にも活躍していました。咸寧から洞庭湖のほとりの有名な岳州に移動したのは、昭和十八年四月頃でした。

思えば、私たちが咸寧に着いたのは第二次長沙作戦と大別山作戦との中間ぐらいの時ですから、一年は居なかつたわけです。新移駐地の野戦病院は湖北省石首といって、洞庭湖の北西、揚子江畔にある街でした。

—湘桂作戦参加は何時頃ですか。

私たちは輜重の行李隊で、野戦病院配属ですから、病院の中にはいるが、病院の内部のことは判らない。

行動は異なるのですが、石首から南下し作戦参加は昭和十九年五月下旬でした。第十一軍の各師団が一斉に蜂起したわけです。目指すのは桂林飛行場で、その占領は十一月ですから、約半年の間、戦闘しながら南下していったわけです。

いろいろな所を通り、いろいろな戦闘がありました。が、一口に言えば空襲を受けながら、岩山の敵を攻撃しながらの行軍の連続だったといえましょう。私は輜重隊ですから、また部隊長の馬当番もしたので、馬との道連れだったわけです。

或る時、こんな経験をしたことがあります。桂林では部隊長の馬当番をしていたが、病院は桂林の手前まで行きました。飛行機が馬を狙って銃爆撃するので、副官の馬当番の初年兵と一緒に馬を繋いで出発命令を待っていた。夕食も食べ、翌日の朝飯も準備をしたが、

予定時間になっても命令が来ない。心のゆるみか、疲労のためか、二人共寝てしまった。ふっと目を覚すも、部隊は寝ている間に出発したのか誰も居ない。どうしようかと思つて、じつと座つて考えていたら、月が出て来た。耳を澄して聞いたら何か、微かに遠くの方で声がある。日本の兵隊の声らしいが、地図は無く、何処へ行くのか途方にくれていた。

不安だが、私には重大な責任がある、とにかくその方向に追及した。

運よくも、漸く部隊の後尾にたどり着いた。隊は病院の後の輜重隊、最後の部隊に追い着いた訳です。若し、もう少し遅れていたならどうしよう、責任からも、あせる気持ちで一杯だった。

道は細い石畳で、一列で行進するため追い越して前に出られない。山道は馬一頭しか通れないわけだ。そのうちに、前の方から通信で「水谷前へ、水谷前へ」と聞こえるが、追及することが出来ない。やっと到着したのは朝の七―八時頃だった。

輜重隊の者から「もう少し遅れたら、敵や土民にや

られたろう」と脅かされたが、脅しではなく、本当にやられたかも知れない。命も大切だが責任も大事なことで、生涯忘れることが出来ない。

作戦に出ても、我々兵隊は命令のままについて行く、何処へ行くのか判らない。作戦中は敗残兵が、うようにして、何処に居るか判らない。私も部隊長の当番なので、敗残兵に射たれたことがある。幸い部隊長は素早く飛び降り溝の中に入った。私はその馬を曳っ張っている。部隊長は、前の方から「水谷、前進」と命令している。しかし、馬は目標になるので敵はバリバリ射ってくる。出るに出来ないで、敵が逃げるまでとうとう馬と一緒に出来なかった。

湘桂作戦の時は、制空権は完全に敵側にあり、米軍の飛行機が、しょっちゅう我軍を狙って銃爆撃に飛んで来る。我々は抵抗することも出来ない。バリバリやられ隠れるのだが、頭隠して尻隠さずの感があるが、その時は笑いどころではない命がけである。私は幸い被害が無くて済んだ。

作戦に出れば、補給が追いつかない。食物を徴発す

るより手が無い。しかし、桂林の付近は岩山が多く、洞窟の中に民兵がいる。天然の要塞のようなもので、食糧や物資もその中に隠してある。他の班の者が徴発に行つて、四、五人やられた。廣西省の民族は少数だが、廣西モンロー主義で、他省の者、他民族、他部隊の者も入れない、気性の猛しい種族である。日本人でも漢民族にでも攻撃してくる。

―桂林攻略は十一月でしたが、鯨部隊は反転して、広東省への南部粵漢作戦や三南作戦に参加したわけですが。

桂林攻略が終つて、野戦病院も桂林から反転して広東に向けて行軍をしました。師団全部が参加するため、野戦病院も全部ついていったわけです。永い作戦だったので輜重隊も随分歩きました。私は部隊長馬当番だったので、服装はちゃんとしていたが、歩兵部隊は補給も充分でなく、作戦・行軍の連続ですから、服も靴もボロボロの者もあり、中国服や中国靴、草鞋履きもありました。南部粵漢線を無疵で確保したり、飛行場を占領したりしたのですが、その苦労は大変なもので

した。

戦闘部隊の服装が余りひどいので、一部は広東の市街地へ入れて貰えなかったということも聞きました。

また反対に土民の服装をして、敵情を偵察したりしていた憲兵や、特殊部隊の人々と会ったこともありまして。

とにかく、永い戦闘と行軍ですから、負傷者や、落伍者、病人も随分出ます。しかし、担架兵が居ないので、中国の人に患者担送をさせるより仕方が無い、手当をする所まで患者を運ばなければならぬ。担送する住民にとっては迷惑な話、しかし、逃げられては患者輸送出来ない。晩は苦力となった人たちを一カ所に寝かせ、兵隊が監視することになる。

そのため、兵隊と苦力との関係は良くしておかなければならない。なだめたり、すかしたり、報酬をやったり、ご機嫌をとったが、患者が増すので仕方なかった。その上に敗残兵や、逆に襲撃する敵も多い。

しかし、我々の第四十師団は強いということが敵側にも判っているので、割合に襲撃はされなかった。弱

いという情報がある部隊は反対に狙われることが多いと聞きました。

支那事変中でも、九州や四国の師団は強いというか、荒いというか、敵は避けたという。長沙作戦の時、第六師団が囲まれ、四十師団が救援に行ったことがある。と古い兵隊から聞いたことがあり、とにかく、うちの師団は強いということであつたらしい。

— 広東からどうしたのですか、終戦は何時頃、何処で知りましたか。

広東にはしばらくいて、西南の新会県江門付近まで殆んど歩いて行き、バナナを食べた経験があり、南国だなと感じた。この時期から三南作戦への参加と思うが、我々兵隊には良くわかりませんでした。五月頃か北上して贛州の方へと行軍した。もう戦局が悪くなったので、日本防衛のためだとか、満州へ行くのだといわれていました。

江西省の南昌へと向かったのですが、八月十三日頃までは敵のバリバリ射つ音が聞こえていました。その頃はもう南昌の西方に到着していたようです。ところ

が、十四日の晩頃だったと思いますが、弾の音がしなくなつて、翌日が十五日で終戦を知つたのです。

終戦後、南昌を出発したのですが、武器を持つたまま江西省の山の中を通つて、鄱陽湖の脇の九江まで十日間ぐらい毎日行軍でした。武装解除は何処だったか、この資料をみると安徽省の蕪湖あたりでしょう。そこまで我々輜重は馬を曳いていった。

その頃は、我々日本人も、これからどうなるか不安だったので、付近の共産軍、新四軍からさそいが随分あつて、部隊から三人程行つたが、その後どうなつたか知りません。その頃は、行く者は行つてもかまわぬというので、何といつても命令で引き止めることは出来なかつた。

二十一年の二月頃、南京付近に集結したのですが、輜重隊の本隊は、蕪湖でも、南京でも、道路の補修作業をさせられ、いわゆる使役労働をしたのです。

いよいよ帰国が決定して、列車で南京を出発するのだが、乗車しても中々出発しない。付け届けというか、袖の下というかをやらないと運転しない。我々は米一

俵を機関車に入れて走つてもらつた。

列車には引き揚げの在留邦人も居る。荷造りした荷物が積み終らぬうちに汽車が出発してしまつた。暫く行つて停つて、またバックして来たが、そこに置いてあつた積み残しの荷物はもう無かつた。運転手と駅や警備している中国軍と話があつたかも知れない。捜しても何処にも無いし、ぐずぐずしていたら発車し上海へも行けなくなる。弱い邦人達は泣き寝入りするより仕方なかつた。

我々部隊では兵隊が団結して強いので掠奪は少なかつたが、それでも、いやがらせのためか、何かを要求するため時々停つたりしたし、持物を検査するなど言つて来た時もある。上海集結には二、三日かかつたような気がします、

上海から輸送船に乗り出帆は五月十日頃でしたか、鹿児島には十三日頃着いたと思います。下船すると検査をされたり、DDTを頭から吹きかけられる。おかげでノミもシラミも駆除されたわけです。復員手続も済ましたのだから細かいことは忘れた。汽車待ちの

ただか鹿兒島で一泊して、高松に着いたのは十六日でした。

私の家は農村なので焼けずに残っていて、お陰で家族も無事だった。家へは知らせていないので、帰って来ることは知らなかったから突然のことでは驚いたり喜んだりだ。一緒に帰って来た高松の戦友は「家に寄ってくれ、高松でゆっくりしよう」と言っていたのだが、家が焼けて跡形もない。「こんなになっちゃると顔色が変わってしまった。

高松の町はみな焼野原で、遠くまで見通しがついてしまっている。楽しみに帰って来たのに、気の毒なことであった。今は戦友同志が年に一度は集って、戦地の話をしている。戦死した仲間も随分いたが、私は野戦病院勤務だったので直接の戦闘も少ないし、病氣も早く診てもらやし、輜重だから、馬の手入れなどでは苦労したが、行軍も歩兵より楽だったので生きて帰れ幸せだと思っている。

歩兵第六連隊中支に戦う

愛知県 赤木 幸雄

昭和十六年徴集と聞いていますが、何部隊で戦地はどこでしたか。

私は瀬戸市の住民でしたので、昭和十七年三月、名古屋の中部二部隊、歩兵第六連隊の留守部隊に入営したのです。一期の検閲が終わって、七月に中支の第三師団歩兵六連隊へと出発しました。師団司令部は応山という所にあり、そこから五十キロぐらいの前線、浙河にある六連隊本部に勤務することになりました。

連隊に到着した時、本隊は討伐のため、河南省の信陽付近に出動中、連隊長も不在で、本部将校がいて我々初年兵は浙河で訓練のし直し、本隊が戻るまで戦闘訓練をしたが二週間ぐらいでした。

本隊が戻ると、初年兵は各中隊へ配属されたが、六連隊へは三五〇名ぐらいだったと思います。本部勤務